



ST. LUKE'S
INTERNATIONAL
UNIVERSITY

特発性肺線維症療養者の 尊厳に着目した看護師育成 プログラムの開発と 混合研究法による評価: 研究プロトコール

1) 猪飼 やす子

1) 聖路加国際大学大学院看護学研究科

Yasuko IGAI, RN, CNS, PhD.

St. Luke's International University, Graduate
School of Nursing Science

igai@slcn.ac.jp

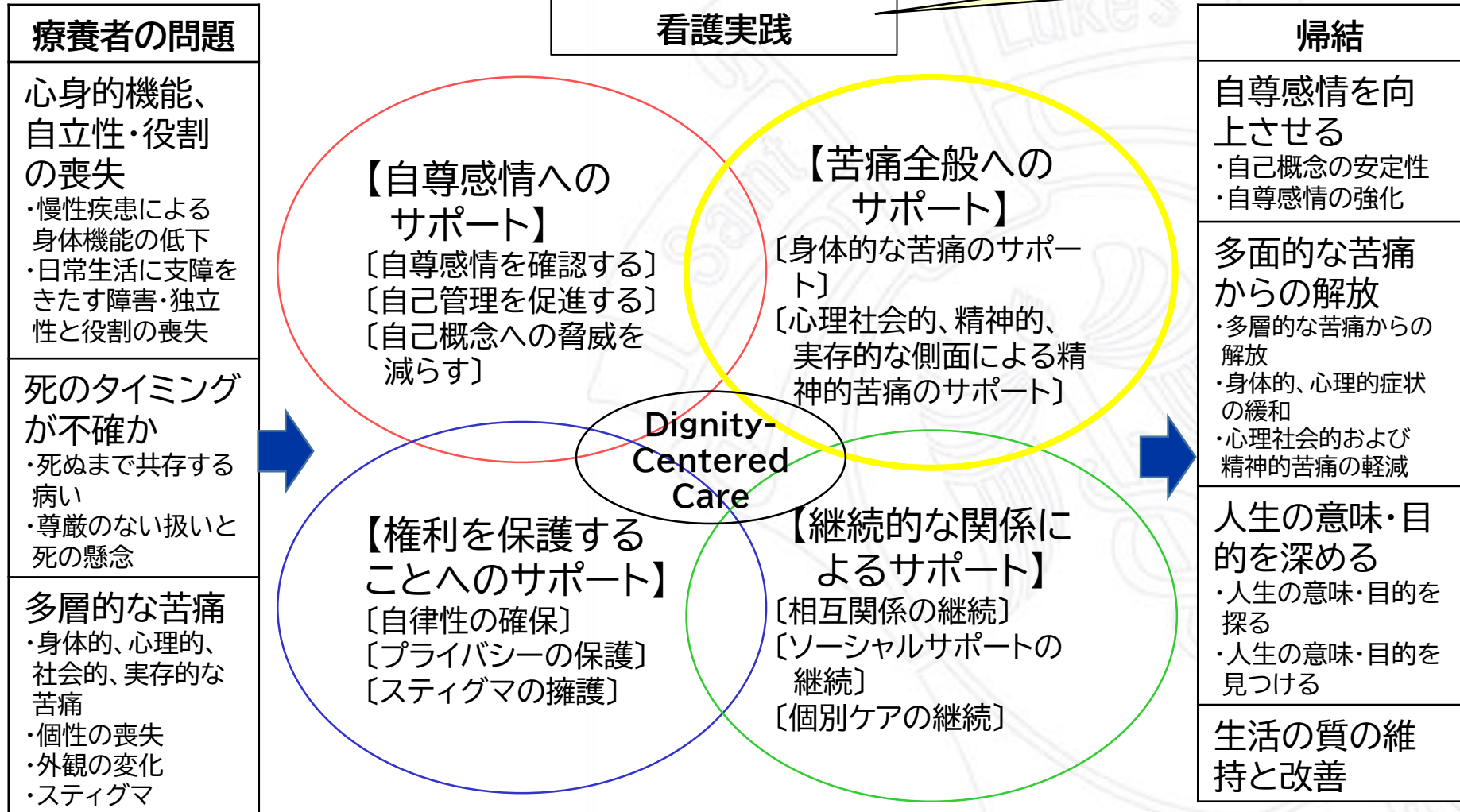
背景 特発性肺線維症とは

- ・ 間質性肺炎のひとつで、良性疾患であるが進行性の難病
- ・ 予後3-5年であり、看護実践者の育成は喫緊の課題

		<p>正常 → 線維化</p>
<p>肺</p>	<p>肺胞</p>	<p>肺胞壁やその周辺の 繊維化が起こる</p>
<p>正常な指 160度 ばち指 180度以上</p>	<p>(%) 100 70 0</p> <p>1秒率 (FEV₁%)</p> <p>拘束性換気障害 正常 混合性換気障害 閉塞性換気障害</p> <p>0 80 100 (%) %肺活量 (%VC)</p>	
<p>主な症状: 乾性咳嗽・労作時呼吸困難・ばち状指</p>	<p>拘束性換気障害 拡散能(%DLco)低下</p>	<p>治療は抗線維化薬や肺移植等 進行により在宅酸素療法導入</p>

IPF療養者の尊厳に着目した 看護実践フレームワーク

e-ラーニング教材作成
19コンテンツ



目的

本研究の目的は、

特発性肺線維症療養者への尊厳に着目した看護
(Dignity-Centered Care)を基盤とした看護を学習する
教材コンテンツのe-ラーニングを1カ月間提供し、

介入前後の看護実践項目数と看護師の自己効力感を
示す量的データと、量的データを説明するための看護
実践の変容に関するインタビューによる質的データか
ら、混合研究法による説明的順次デザインにより看護
師育成プログラムを評価する



研究デザイン

看護実践項目数と自己効力感の層化ランダム化比較試験による量的データの変化を看護実践の変容に関する参加者選定モデルによる質的データで説明する混合研究法の説明的順次デザイン（Creswell & Plano-Clark, 2007）

研究設問 (Research Question)

- IPF療養者への看護を学習する教材コンテンツのeラーニングを1カ月間受講することにより、

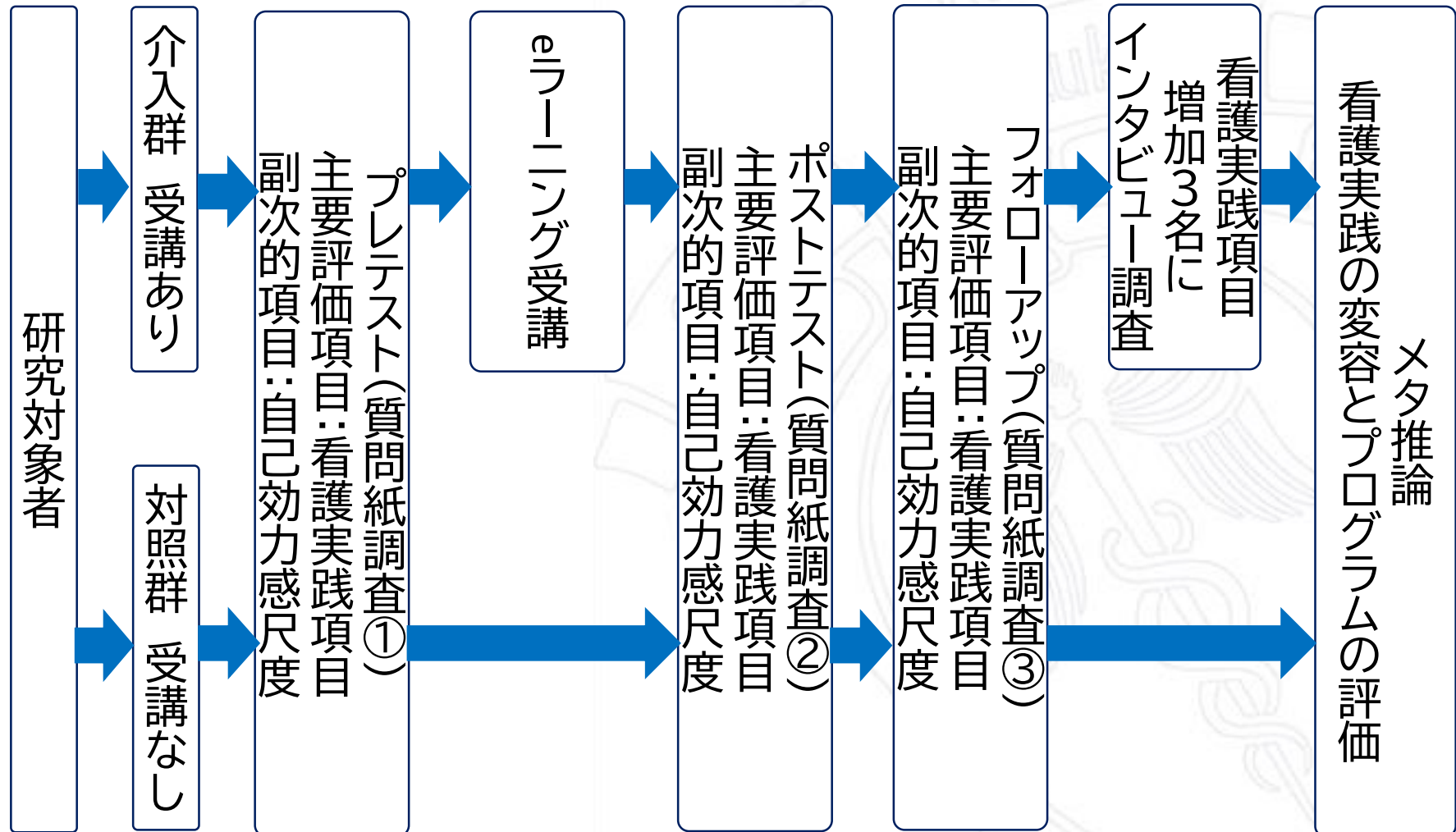
① 主要評価項目: 看護実践項目数の増加はみられるのか

副次的評価項目: 自己効力感は向上するのか

② 看護実践はどのように変容したのか

③ 特発性肺線維症療養者への看護師育成プログラムは、
①の量的データを、②の質的データにより、なぜ変化したのかを説明し、自己効力感や呼吸器専門病院の所属の有無などの背景を含めどのようにメタ推論されるか

概念モデル



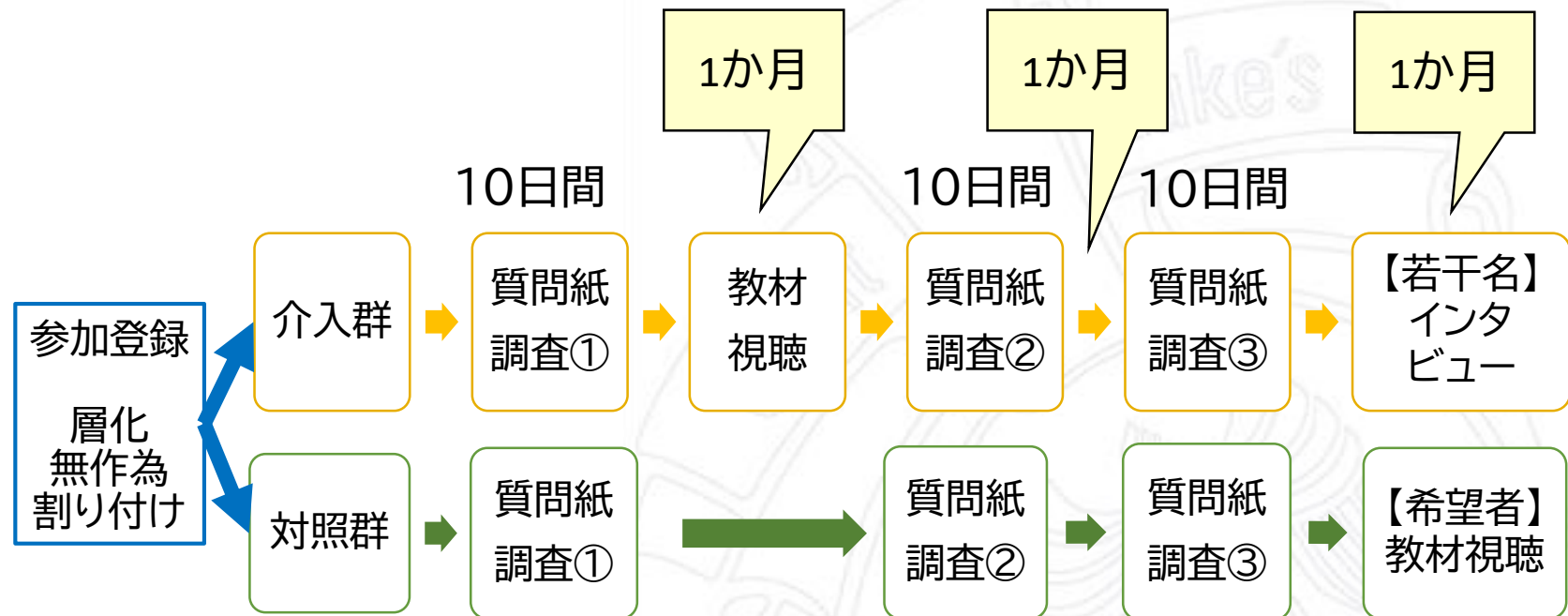
研究方法

- 研究対象者の呼吸器疾患を専門とする認定看護師ならびに専門看護師の有資格者で、基準を満たす276人にチラシを郵送
- **選択基準**
 1. すべての質問紙調査を特発性肺線維症療養者に外来もしくは在宅で看護実践を行った上で回答できる者
 2. 本人から電子的な方法による同意を得られた者
 3. フリーWi-Fi以外でインターネット接続環境が準備できる者
- **除外基準(いずれかに抵触する者は組入れない)**
 1. 小児専門病院、療育センター、他疾患専門治療施設、教育機関に所属している者
 2. コンピュータ等、eラーニングの受講に必要な機器、および通信環境を自身で調達利用・操作できない者
 3. その他、研究責任者が不相当と判断した者

研究方法

- 目標症例数 46例
- 算出根拠
 - 2群の平均値の差 d : 看護実践の実態の予備調査で得られた平均実施項目数21項目(実施率63%)を参考に、介入後の看護実践項目数が20%程度増加の27項目と見積った
 - ばらつきの大きさ σ : 予備調査での平均実施項目数 21.4 ± 7.4 を参考に7.0と見積もった
 - 第一種の過誤(α エラー)の α を両側 5%、検出力 $1-\beta$ を 80%
 - 人事異動などによる脱落率10%を考慮し片群23人を想定
- 本研究は所属の研究倫理審査委員会(A22-029)の承認済み

実施の流れ

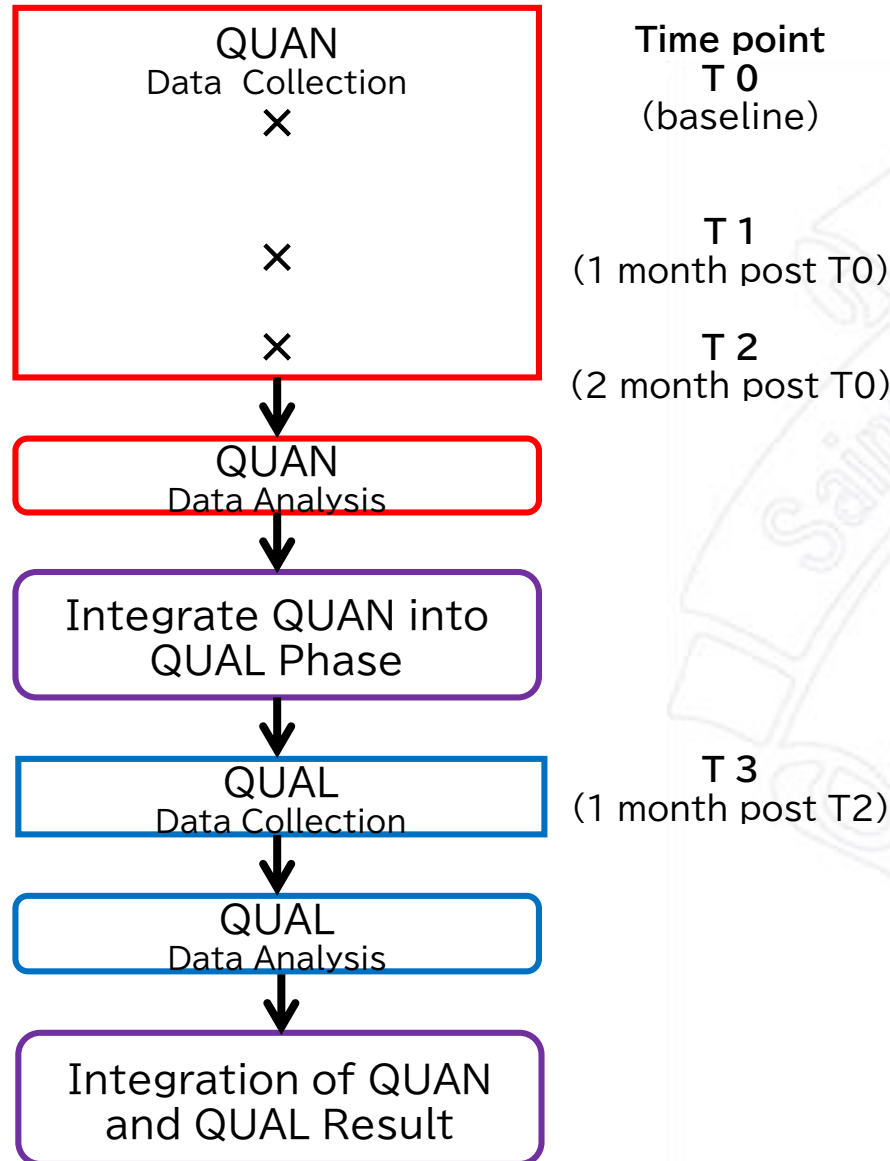


- ・『呼吸器専門病院に所属しているかどうか』という要因を層化
- ・介入群と対照群に均等に割り付ける層化ランダム化比較試験
- ・質問紙調査：①看護実践項目34問、②自己効力感尺度
- ・教材視聴後、看護実践項目が増加した3人に、インタビューガイドに基づく半構造化インタビューを実施予定(参加者選定モデルの採用)

手続きダイアグラム



ST. LUKE'S INTERNATIONAL UNIVERSITY
Do your best, and it must be first class



QUAN手順

尺度・アンケート

Primary outcome:看護実践項目34項目

Secondary outcome:自己効力感尺度(坂野ら, 1989)

調査時期

T0: 属性(年齢、性別、看護師経験年数、現在の配置場所、IPF療養者と関わる機会、看護介入開始時期、呼吸器看護外来設置有無、呼吸器センター設置有無)

T1:T0から1か月後

介入群:Providing e-learning of nursing practice for IPF

対照群:Not receiving of the e-learning

T2:T0から2か月後

分析 (Data from T0 & T1 & T2)

看護実践項目34項目(2件法)

自己効力感尺度(坂野ら, 1989)(2件法)

介入群:プログラム教材19コンテンツ内容評価

QUAL手順

教材視聴後、看護実践項目が増加した3人にインタビューガイドに基づく半構造化インタビューを実施

参加者選定モデル

呼吸器専門病院に所属している者

呼吸器専門病院に所属していない者

訪問看護ステーションで在宅支援をする者

調査時期

T3:T2後1か月間、n = 3

連結手順 1. 解釈:看護実践項目の増加/低下と、行動変容の基盤となる自己効力感尺度の高値/低値

連結手順 2. 統合:T0~T2での定量的評価と看護実践の変容の定性的経験から、プログラムを総合的に評価する

連結手順 3. メタ推論:結果の統合に基づくメタ推論

Figure 1. Procedural diagram of a explanatory sequential mixed-methods study design: Nurse training program on dignity-centered care of people with IPF

混合研究法への示唆

- IPF療養者への看護師育成プログラム教材の受講により、看護実践項目はなぜ増加するのか？

- 参加者選定モデルにより看護実践項目が増加した者のうち、

1. 呼吸器専門病院に所属している者
2. 呼吸器専門病院に所属していない者
3. 訪問看護ステーションで在宅支援をする者

で各1名ずつ、合計3名にインタビューを行い、なぜ看護実践項目が増加したのかを調査予定

- 混合研究法の説明的順次デザインにより、看護実践項目が増加した要因を、質的データ、ならびに自己効力感の変化と合わせて分析、評価する
→サンプリング・参加者選定モデルの妥当性の評価

統合について

- 説明的順次デザインの連結(connecting)
- 参加者選定モデル

	QUAN Nursung practice items	QUAL semi-structured interview	QUAN Self-efficacy	Meta- inference
介入 群	呼吸器専門病院で看護実践項目増加者の変化量(T0、T1、T2)		3回の自己効力感の結果(T0、T1、T2)	
	一般病院で看護実践項目増加者の変化量(T0、T1、T2)		3回の自己効力感の結果(T0、T1、T2)	
	訪問看護で看護実践項目増加者の変化量(T0、T1、T2)		3回の自己効力感の結果(T0、T1、T2)	
対 照 群	呼吸器専門病院で看護実践項目増加者の変化量(T0、T1、T2)		3回の自己効力感の結果(T0、T1、T2)	
	一般病院・訪問看護で看護実践項目増加者の変化量(T0、T1、T2)		3回の自己効力感の結果(T0、T1、T2)	

参考文献

- Fetter, M. D. (2019). The Mixed Methods Research Workbook: Activities for Designing, Implementing, and Publishing Projects, 73-75, SAGE Publications, Inc
- 坂野雄二, 東條光彦 (1986). 一般性セルフ・エフィカシー尺度作成の試み(原著論文). 行動療法研究, 12(1), 73-82. doi:10.24468/jjbt.12.1_73